30D-am02

スズキ記念病院における妊婦への処方状況 : BOSHI 研究

〇佐々木　彩乃[1], 目時　弘仁[2], 佐藤　友里恵[1], 星川　美奈子[1], 阿久津　好美[1], 小原　拓[3], 大久保　孝義[4,1], 岩崎　雅弘[5], 今井　潤[1], 鈴木　雅州[5]（[1]東北大院薬, [2]東北大院医, [3]東北大病院薬, [4]滋賀医大医, [5]スズキ記念病院）

【目的】1960 年代のサリドマイド事件以降、妊娠中の服薬が胎児に影響を与えるという認識が広く浸透しており、服薬に不安を感じる妊婦は多い。必要な薬物治療の自己中止を防ぐためにも適切な服薬指導が必要となるが、妊婦への処方状況に関する報告は少なく、適切な指導を行うにあたって必要な情報が不足している。そこで、妊婦への処方状況について調査を行った。【方法】宮城県のスズキ記念病院にて実施中の BOSHI 研究に参加した妊婦 653 名に関して、内服薬の処方状況を産科の診療録より調査した。また、妊娠前体重、出産歴などの情報を初回受診時の自記式問診票から取得した。【結果】対象者の年齢は平均 31.3±5.0 歳、出産歴を有する妊婦は 41.8%であった。93.4%の妊婦が妊娠中に何らかの薬剤を処方されており、薬の種類としては造血薬（76.1%）、子宮収縮抑制薬（39.5%）、解熱鎮痛薬（19.8%）、消化機能改善薬（19.6%）、抗生物質（14.1%）が多く見られた。妊娠期間別に検討すると、妊娠初期から後期にかけて造血薬（初期 2.9% → 中期 44.1% → 後期 61.7%）や子宮収縮抑制薬（初期 8.9% → 中期 19.8% → 後期 24.0%）の処方が大きく増加していた。また、妊娠高血圧症候群を発症した妊婦が 10.0%存在し、妊娠後期に降圧薬の処方も増加した（初期 0% → 中期 0.3% → 後期 3.4%）。【考察】90%以上の妊婦が内服薬の処方を受けており、妊娠期間によって服薬状況に変化が見られた。特に造血薬は妊娠後期に約 60%もの妊婦に処方されていたが、近年、鉄剤服用が妊娠高血圧症候群や妊娠糖尿病の発症と関連するとの報告があり、予防的な鉄剤服用や過剰服用は避けるべきである。したがって、鉄剤の処方された妊婦では鉄含有サプリメントや OTC 薬の重複がないか確認するなど、妊婦のセルフメディケーションについても把握する必要があると考えられる。